

# こころ通信

第99号  
2013年6月号  
発行  
(有) 中村薬局  
編集責任者  
金巻 裕

## 三町商店街と 都留文大生

毎月13日の朝に鳴る花火の音。何の花火かご存知でしょうか？これは本店が加盟する三町商店街の「十三の市」という売出しの合図。今月で670回目を数える歴史ある売り出しです。

三町商店街は都留市駅と国道139号線の交差点を中心に横町、田町の大火をきっかけに力強く復興してきた商店街。ここで谷村の大火について少し触れてみ

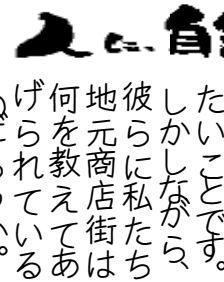
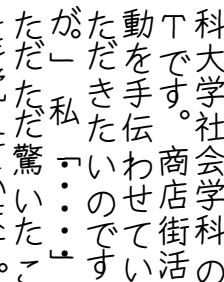
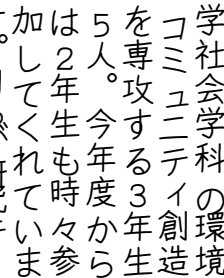
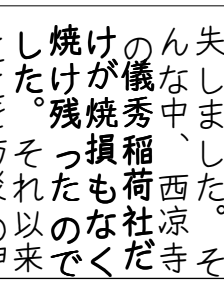
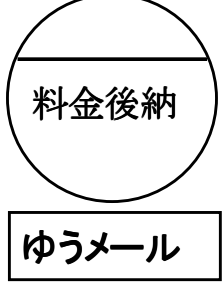
ます。昭和24年5月13日午前2時30分、下谷町の燃焼工場のモーターの過熱から出火。乾燥つづきの天候と折からの風速15メートルの烈風にあおられ、火は瞬く間に下町の一部、横町の全域、栄町、田町の一部を焼失する大火災となりました。午前6時50分ごろようやく鎮火したそうです。羅災地は谷村町の繁華街の中心地であり旧家も多く、また東漸寺、専念寺、西涼寺の寺院や多くの文化財を焼失しました。そんな中、西涼寺の儀秀稲荷社だけが残ったのでした。それ以来ここを防災の神

マを設定し自主的な研究を進める勉強熱心な学生さん達。そのグループ名は「プロシエクト研究」。彼らは「地域やそこに暮らす人々と積極的に関わることから学ぶ」という活動方針を掲げているのです。私は三町商店街で事務局長をしているので彼らと関わることがとても多いのです。毎月1回行われる夜8:30からの役員会にも彼らは欠かさず出席してくれました。会議が行われる三町亭まで、文大方面から自転車、時には歩いてまで来てくれるのです。イベントの企画内容を立案してくれたり、イベントの手伝いをしてくれたりとして頼もしい仲間です。今月13日の儀秀稲荷例大祭における三町商店街

の抽選会を手伝ってくれたり、早朝より豚汁200人分を作ってお祭り会場で市民に無料配布してくれました。他にも農業系サークルのメンバーも加わって、自ら育てたもち米から作ったおもちをふるまってくれたのです。彼らのその素直な人柄に心打たれずにはいられません。学ぶということ、素直であることがとても重要に感じます。批判が先にあれば学びは浅いものになってしまいうからです。因みに、学生さんと文大生との関わりは平成10年度から3年間かけて行った商業活性化事業の時から。ある日一人のTさんが店に私を訪ねてきました。Tさんははじめま科大学社会学科のTです。商店街活動を手伝わせていた私「……」とを覚えています。

商業活性化事業の事を知って訪ねてきたのです。Tさんは約2年半私たちの活性化事業に携わり、その間にも同様に地域に興味ある学生を連れて来てくれました。彼女の卒業論文のテーマは「三町商店街物語」。毎月13日のチラシをせむじんに眺めてみて下さい。チラシの上部に「次に自然にあつたか三町」というキャッチフレーズが筆字で書かれています。これはその女子学生が考え自ら筆で書いたものをそのまま使用しているのです。その頃から現在までその時々で人数こそ様々ですが文大生とのつながりが続いており、本当にありがたいことだと思います。しかしながら、彼らに私たちが地元商店街は何を教えているのだろうか。

学生時代という貴重な彼らの時間を果たして有意義なものにしてあげられているのか。そんなことを自問自答しています。商店街個々もつとむと努力するしか方法はありません。そんな姿を学生さんたちにそして次の世代へと見せていくことが私たちが現役世代の重要な責任なのかもしれせん。来月は671回目の十三の市。当初から売出しスタートの合図として親しまれてきた花火の音が消える。ここから更なる踏ん張りにはいかな。



**ナカムラ薬局**  
都留市中央1-5-12  
43-1177